

松村圭一郎著

『うしろめたさの人類学』

ミシマ社、2017年、定価1,700円＋税、189頁

劉振業*

本書は、各章の冒頭に日本の身近な事例をもって議論をはじめ、アフリカの東側にあるエチオピアにおける著者のフィールドワークの実体験を主な事例として、日々における人びとの贈与や言葉のやりとりを通じて、「うしろめたさの倫理」（173：以下、本書の引用頁は数字のみを記す）を打ち出して越境的な行動を促し、近代社会において断絶した世界の「つながり」を取り戻す試みを描き出した民族誌である。本書は、人類学とは無縁の人に向けても、学問の垣根を超えた越境的な贈り物であり、紡いだ言葉に難解な学術用語が多数登場することはない。本稿では以下に示す本書の構成に従い、簡単な解説を試みる。

はじめに

- 第1章 経済——「商品」と「贈り物」を分けるもの
- 第2章 感情——「なに／だれ」が感じさせているのか？
- 第3章 関係——「社会」をつくりだす「社会」と「世界」をつなぐもの
- 第4章 国家——国境で囲まれた場所と「わたし」の身体
- 第5章 市場——自由と独占のはざままで
- 第6章 援助——奇妙な贈与とそのねじれ
- 終章 公平——すでに手にしているものを道具にして
- おわりに 「はみだし」の力

目次においては明記されていないが、第1章から第3章までが第一部、第4章から第6章までが第二部という構成となっている。第一部では、日本とエチオピアにおける贈与や人びとのやりとりをミクロなアプローチから議論し、経済、感情、関係という3つの概念をもって考察を進める。第二部では、第一部とは対照的にマクロなアプローチで議論が展開され、国家、市場といった「大きな概念」からの分析がなされる。そして終章では、各章で展開した議論をもとに、「公平さ」を希求することの可能性を検討した。以下で、各章の内容を簡単に要約したい。

*LIU Zhenye 京都大学大学院人間・環境学研究科 karuma917@gmail.com

「はじめに」では、本書がいかなる民族誌であるのか、その枠組みが提示される。問題提起は「物事の構築性をふまえたうえで、なにをどう変えていけばいいのか」(16)という問いかけである。構築主義は、物事の構築性を摘発することに優れた力を持っているが、その核心は「批判」そのものにはない。構築主義の先に立脚するものとして、著者が着眼したのは贈与の力である。本書は、贈与的な行為を、正反対の行為だとされる「商品交換」や「市場」、そして政治の制度である「国家」との関係のなかに位置付けてみる。あらゆる分断が起こっている近代社会においては、「贈与」をもって他者に向き合い、いろんな「つながり」を回復することが必要だと著者は述べている。

第1章では、経済活動における「商品」と「贈り物」を分けるものとして、「共感の力」について考察している。著者はまず、日本におけるバレンタインのチョコレートをめぐって、その「商品らしさ」や「贈り物らしさ」の演出によって、「商品／経済」と「非商品／非経済」が区別されていると指摘している。さらに、贈り物は、思いや感情をモノのやりとりで付加したり、除去したりするための装置であると述べている(28、傍点著者)。この贈り物は、人と人との関係を意味付ける役割を果たしているのである。しかし、そのような関係に縛られて身動きがとれないのであれば、分断が起こっている構築された近代社会において「つながり」を回復したり、社会を動かすことができない。

それと反対に、著者が取り上げたエチオピアの例では、物乞いに対して「なにもあげない」ことを選ぶ日本人に対して、ポケットから小銭を渡すエチオピア人が対照をなす。

「経済」と「非経済」の区別がモノの「交換モード」に置き換えられているのである。この「交換モード」には、コミュニケーションの基盤である「共感」を抑え込む力がある。格差によって生じる「うしろめたさ」という共感が、「交換モード」によって覆い隠され、それをすり抜けた先に、社会を再構築する鍵があると著者は指摘している。贈与は人間関係において共感を増幅し、交換はそれを抑圧すると著者は結論づけている。

第2章では、感情は自己完結するものではなく、「他者」の存在によって生み出されていることを明示し、感情を生んでいる原因は「なに／だれ」なのかを解明する。空港における自動券売機や定刻のバスなど、不自由もストレスもないシステムが整う日本において従業員さえ「記号化」されたのに対し、エチオピアでは他人とのかかわりのなかにあって、プライベートの時間がほとんどないと著者の実体験を述べている。その過程で、日本では感情の生じ方が意図的に操作されているように著者には思われた。さらに、人やモノの配置にそって感情の意味が確定され、涙や顔の表情がひとつのリアルな「感情」として理解可能になるのである。そのため、他人との関係が変われば、感情の生じ方にも違いがでる。交換や贈与というモノを介したコミュニケーションは、まさにその関係をつなげたり、切り離したりする行為であり、お互いが感情に満ちた贈与／共感の関係にあることを、そのつど確認する作業をしているのである。このように、感情は他者とのモノや言葉のやりとりという行為の「輪」のなかで現実化する。

第3章では、人間関係が行為をもって確認され続ける過程を描いている。関係が行為に先立つのではなく、その場における行為の蓄積によって、なんらかの関係をリアルなものとして感じとっており、こうした行為の繰り返しが人と人との「関係」というひとつの現

実をつくりだしている」と著者は指摘している。そのため、「関係」は互いの行為によって変えることができる。例として挙げられたのは、エチオピアにおいて民族、宗教を超え、地域的なつながりを重視して行われているコーヒーの共同飲食である。コーヒーをともに飲むことが、「親密な関係」を公的な事実とし、その「つながり」を可視化するのである。異質な他者を既存のカテゴリーに押し込め、最初から関係を築くことを拒絶してしまう「わたしたち」と異なり、エチオピアにおける共同飲食には豊かな可能性が秘められている。

このように、第一部では、「関係としての社会」を動かしていく可能性が提示された。その可能性の根拠は、以下のようにまとめることができる。まず、「社会」は人や言葉やモノが行き交う場であり、人との言葉やモノのやりとりの方法を変えれば、感情の感じ方も人との関係も変わる。すなわち、「社会」は、モノや行為を介した人と人との関わり合いの中で構築される。そして、それによって生じる関係のなかから「わたし」や「わたしたち」が生まれ、「かれ」や「かれら」が生まれている。著者が主張するのは、不断に生み出され続ける関係の、その連鎖の中での変動が、社会を動かす可能性となる、ということである。

続く第二部では著者は、経済、感情、関係というミクロな概念からいったん脱却し、国家と市場という二つのマクロな概念に目を向ける。マクロな概念を扱うものの、著者は第一部における描き方と同じように、身近な事例から国家と市場を考える。「等身大の自分には実感としての手触り」(94)があつてこそ、わたしたちの身の回りにおける「社会→世界」の構築に参画する可能性が提示できるという。

第4章では、国家と「わたし」の身体との関係性について論じている。役所に書類を届けることによって国民としての実態が把握され、国家の政策や制度が身体化された日本において、一人ひとりが意識するしなやかにかかわらず、日々さまざまな行為が国民としての機能を内側から支えている。それに対して、エチオピアにおいては国家支配が強力であるものの、日本のように戸籍や住民票制度が存在せず、社会的な関係や状況に応じて名前の呼び方が変わり、その呼び方によって、その人との関係が示される。要するに、「名前」の複数性が可能であるエチオピアにおいては、日本のように身体と国家の関係は、個人の同一性と単一性が国家政策によって確認され、内面化／身体化の度合いと深く関わっている状況と異なり、それほど密着していない。この両国の国家と国民の関係を分析すると、わたしたち日本人の「あたりまえ」の行為が国を成り立たせており、身体が「国家」とつながっていることが可視化される。

さらに、エチオピアとエリトリアとの戦争においては「国民」としての愛国心が奨励されたため、エチオピアの村ではエリトリア出身の職員が追放され、「国民」の輪郭が人びとの意識に刻み込まれると指摘する。こうした国境をめぐる争いを通じて、国境が「国民の身体」の延長として想起され、「敵」を追放するという行為によってその「身体」を護るのである。

以上のように、エチオピアでは「国家」と「わたし」の二重の運動が観察される。「わたし」の身体は「国家」の制度によって受肉され、「国家」の領域は「わたし」の身体の

延長として現出する。この二重の運動のなかで「わたし」が生まれ、「国家」が実現する。

第5章では、市場と「わたし」との関係性について論じている。1974年から1991年にかけて、エチオピアは一党独裁の社会主義体制を経験したが、現在では自由主義的な市場経済に変わり、権限と責任は国家から個人へと分散して、ゆだねられている。しかしながら、市場経済では社会でよい（129、傍点著者）とされる価値は多数の消費者の決定にゆだねられ、価値をつくりだし、意思決定しているのは無数の「わたしたち」である。市場／民主主義では、わたしたちの日々における一つ一つの行動が世界／社会をつくりだすことを可能にしている。ところが、「市場」では、特定の価値選択へと個人を誘導する誘惑の構造が見られ、また、公平とはほど遠い偏った富の配分がなされる。それでもなお、人は市場の片隅で自分がよいと思う価値を発信する自由があり、世界の構築に参与する手段をもっていると著者は主張している。この対立を、著者は「市場」の両義性と呼ぶ。

この「市場」の両義性に向き合うとき、「国家」との関係が重要になる。自由市場か、計画経済の統制市場かは国家の関与の度合いで決まり、市場と国家は互いのバランスをとりあっているのである。それは、国家が市場にどのようなルールをつくり、消費者／有権者がそれをいかに選択するかにかかっており、市場と国家の力学を見極め、世界とわたしたちをつないでいる糸を紡ぎ、スキマをつくる道を指し示すことに、構築人類学の仕事はあると著者は指摘している。

第6章では、「援助」の「国家」と「市場」における位置づけを考察している。洪水と旱魃の被害が多発したエチオピアは、2008年にアメリカから80万トンの食糧援助を受けた。しかし、食糧不足が深刻な問題であると政府がアピールしているものの、実際には飢えで人が倒れるような状態はどこにもなかった。また、「食糧援助」は、じつはアメリカ国内における農産物の価格維持のための調整手段でもあった。ここに国家と市場の奇妙な依存関係が透けてみえる。現地への悪影響を最小限に抑えることと、先進国からの援助は贈与であるという二つの理由から、援助食糧は原則上、売却／交換禁止であるが、エチオピアでは、人びとがその食糧を市場に並べて売ったり、親類縁者を招いて催す宗教的な祝祭に使ったりする様子が見られる。市場に売られている援助食糧は、市場と非市場とが裏でつながり、モノが「贈り物」と「商品」のあいだを行き来することを示している。宗教的な祝祭に使われる援助食糧は、贈り主のわからない贈与が別の贈与へと転用され、社会関係を維持するささやかな楽しみの空間をつくりだす。さらに、村では村の議長たちが援助食糧の配分をとおして自分たちの政治力を高めていることから、アメリカの国内農業保護や外交戦略的な思惑も、援助相手のエチオピアでは国内の政治的意図に塗り替えられ、さまざまなレベルで政治的リソースとして流用される。

要するに、わたしたちの行為がこうしたモノの連続的な動きのなかに仮の区切りを入れ、この仮の輪郭が「世界」をつくりだす。市場と国家のはざまに生まれた食糧援助という奇妙な贈与行為が、贈与先のエチオピアでさまざまな経緯をたどって別の世界を構築している。それは、現代のグローバル化した世界のひとつの縮図であると著者は指摘する。

「国家」と「市場」、そして個人の行為との関係性について論じた第二部では、その関係性を以下の3点でまとめることができる。まず、個人の日常的な行為は、国家や市場と

いった大きな動きと「連結」しながらも、かならずしも「連動」していない。国家や市場の「思惑」は、最後は個人のささやかな行為のなかで解消される。そして、国家の権力や市場の搾取は、上からの暴力的な支配によってのみ実現されるわけではなく、あらゆる人びとの主体的な行為のなかで現実化する。最後に、国家や市場による構築性を批判するだけでなく、自分たちの構築力に目を向けるべきである。

終章では、「公平さ」の追求と、前章までで論じてきた概念との関係性について解明する。「公平＝フェア」な場（165）とは、多様な生き方や価値観が許され、それぞれが違った役割を担い、同時に、その差異をつなぎ、共感し、調停する仕組みもつくるものであると著者は定義する。「公平さ」を希求する志向は、すでにわたしたちの心と身体に深く刻まれており、「うしろめたさ」のような気持ちが公平さというバランスを取り戻そうとする欲求である。すでに述べたように、社会／世界は、人とモノが行き来し、配置される、その営為のなかに生じている。そのため、公平さのバランスを取り戻す手段は以下の表にまとめられる。

表1 公平さのバランスを取り戻す手段（168-171 頁より、評者作成）

手段		効果	人の関係に対して
偏りそのものの否定		擬似的にバランスを回復できる	自分とは無関係なものにする
物や財を動かす「移譲」	市場での交換	個々の必要性をみたく最適値を目指す	人の関係を解消する
	社会的な贈与	感謝や愛情といった感情を表現し、相手との関係を築くコミュニケーション	人と人をつなげるが、「義務」を感じる
	国家による再分配	国民の負担を国家や政治家の功績に変える仕組み	本来あるべきつながりが途中で切れている

しかし、電車における席譲りなど、身近な経験レベルにおいては、国家や市場の仕組みの影響に限界がある。相手の様子やその場の状況に応じて、自発的に席を譲り合うという個人のコミュニケーション・レベルでの対処が必要となり、「共感」のスイッチが入り、「うしろめたさ」が生じる。公平さのバランスを取り戻すにあたり、国家や市場の仕組みの抜け落ちる部分に対処するとき、「うしろめたさ」という自責の感情が宿る倫理性を、著者は「うしろめたさの倫理」と呼ぶ。

最後に、構築人類学にできることとして、著者の意見を以下の3点にまとめることができる。まず、わたしたちにできることとして、モノの動かし方を組み合わせて越境すること、世界を変える手がかりがあると著者は述べている。そして、越境を促すことによって、関係を解消させる市場での商品交換に関係をつくりだす贈与を割り込ませ、感情あふれる人のつながりを生み出すというのである。つまり、市場や国家というシステムを「わ

たし」の行為が内側から支えているからこそ、「わたし」の越境的な行為が、市場や国家を揺さぶり、「スキマ」をつくりだすことができるということである。最後に、一人ひとりの越境行為によって、市場や国家に新たな意味を付与し、別の可能性を開いていくことが重要であると著者は呼びかけ、本書を締めくくる。

以上が本書の概略である。本書の特筆すべき点のひとつは、その論じ方である。記述、分析を行うにあたっては、日本における身近な事例から出発してエチオピアでの著者の実体験へと移り、考察する。文化人類学と無縁な読者にも関心をもって理解できるように工夫されていると言えよう。また、国家や市場など、大きな概念を扱うときも日常生活における事例を詳細に分析することによって、わたしたちと国家や市場といったこの世界のつながりを可視化している。もうひとつの特筆点としては、人びとの日常的な行動が、構築主義の先で、現実を再構築する可能性として提示されることにある。「うしろめたさの倫理」という概念を導入し、それと向き合うことによって、日々の行動の内に、境界線を攪乱する能力などの新たな可能性の地平が開かれていく。そうした点から、本書は、等身大の自分に潜んだ可能性を新たに見出す、文化人類学の魅力を一般の読者にも広く発信するものである。

しかしながら、外国人である評者としては、本書が日本の読者を想定しているためか、日本の事例を用いてエチオピアでの出来事を相対化する一方で、日本社会における出来事自体が相対化されていないことに違和感を禁じ得ない。

例えば、第1章で「家族」という領域が、贈り物や祝儀袋などに包むという外面的な体裁に頼った「非経済／贈与」の関係として維持され、家事や育児は経済的な「労働」と見なされないと著者は述べているが、中国広東省の場合、春節や清明節、中秋節など親族団らんの集会においては何も包まないで直接現金を上世代の親族に渡す場面がよく見られる（そもそも「家族」という概念の相対化が必要であるが）。中国広東省の「家族」においては、商品を買って贈り物としてプレゼントするより、経済能力を持つ子どもが親世代以上の親族に現金を手渡すほうが好まれる傾向にある。さらに、エチオピアの物乞いに日本人の多くは、彼らにお金を払う理由がないため「なにもあげない」ことを選ぶが、中国においては物乞いに対し「うしろめたさの倫理」が発動し、直接小銭をあげることがよく見られる。しかし、この二つの場面における現金を手渡す行為は「支払い」とはみなされず、貨幣そのものが「贈り物」となっている。そのため、中国では、日本社会のように包装をもって「商品／経済」と「贈り物／非経済」の区別がはっきりしていない。この点でも、日本の事例を相対化して考える必要があるだろう。あるいは、中国における親族や物乞いに現金を渡す行為自体に、境界線をずらす一種の可能性が秘められていると指摘することも可能だ。

また、不均衡に対する「うしろめたさの倫理」が人びとに感染して、「自分」の行動が公平さを取り戻し、世界を動かしていくことができる、と著者は述べているが、うしろめたさという感情に身を任せることは、必ずしも公平さの回復という「良い結果」につながるわけではない。現に、中国社会では「うしろめたさ」に身を任せて行動したが故に、かえって社会的地位が反転したり、社会的弱者と献金組織への不信感が高まったりすること

も見られ、公平さのバランスが崩れて「うしろめたさ離れ」とも言える問題に直面している。例としては、道端で倒れている老人を助けた人が、老人に故意の傷害を加えた事件であるとして賠償を要求される「老人不信」問題がおこったり、人身売買とも関わる「組織化」された物乞い「産業」というニュースによって、人びとが物乞いにお金をあげなくなった「物乞い不信」問題、さらに被災地に献金したお金が、中国赤十字会という献金組織の幹部の愛人のブランド品購入に使われた「献金組織不信」問題などが挙げられる。いずれの例においても、人びとが社会的弱者を目の当たりにした際、「うしろめたさ」の感情が生じ自ら「贈与」の行動をとって公平さのバランスを取り戻そうとしているが、その「うしろめたさ」が悪用されたため、人びとが自らの「うしろめたさ」の感情から目を背け、公平さのバランスがさらに崩れている。著者はわたしたちのなかの「うしろめたさ」を起動しやすい状態にすることが重要であると主張しているが（174、傍点評者）、「うしろめたさの倫理」がわたしたちのなかで生じることによって完結するのではなく、「うしろめたさの倫理」に関連する他者や社会状況などの「信頼としての前提条件」を再検討する必要性が残っているのではないだろうか。

ただし、評者が感じたこうした違和感や疑問点は、本書が「人類学とは無縁の日本の読者」にもわかってもらうために身近な事例を用いたことに由来する部分も大きいであろうということは再度述べておく。日本社会に生きる一般の読者にとっては、社会状況自体をあえて相対化する必要性は希薄であるかもしれない。

「感情にあふれた」本書は、断絶した世界において「つながり」を回復する手助けとなる示唆に富んでいる。ぜひさまざまな人に本書を手にとってもらい、日常生活における行動に潜む「越境的な可能性」を見出していただきたい。